

# 『小説神髓』、分冊形式の謎

鈴木裕人

## 『書生気質』『小説神髓』の出版形式

春のやおぼろ（坪内逍遙）の『<sup>三歌</sup>当世書生気質』は、明治一八（一八八五）年六月から翌年一月にかけて晚青堂より和装本分冊形式で出版された。今日では目にすることの減多にないこの出版形態は、昭和十年代においても同じ状況であったようだ。分冊形式に幾度か言及してきた柳田泉は、岩波文庫版『書生気質』の「<sup>一</sup>解題」で次のような結論に至っている。

『書生気質』の出版形式は、和紙清朝四号活字印刷で、分冊雑誌式となつてゐるが、これが小説刊行の形式として頗る珍らしいものたることは勿論ながら、往々考へられてゐる如く先生の創案に成るものではない。蓋しこれは明治二十三年頃に始まる活字草双紙形式の変形したもので、『書生気質』以前に既に、三遊亭円朝の『怪談牡丹燈籠』（明治十七年）、伊東専三『名立波籠神於珠』などといふものがある。これらは寧ろ此の頃もて囃されかけた新しい出版形式だといふので出版者側で提案するか暗示するかしたものを、先生の側でそのまま採用したものと考へたい。或は、未完成のものを一部づゝ、出版するといふ都合から、先生がかゝる形式の採用を主張したものと見ても可からう。何れ

にしても、先生の創案でないことは事実である。

この文章が収録された岩波文庫は、円本ブームに追随して昭和二（一九二七）年に刊行され始めた。林哲夫の指摘のよ  
うに、共通の装幀を施された叢書である文庫本において、その書物が本来備えていた特徴を語ることは、明治は遠くなり  
にけりになった今日、一層意義深いものとなっている。

さて、引用部は、『書生気質』の分冊形式に先例があったことを指摘した上で、一体誰が、どういう理由で分冊形式を選  
んだのか、という問題に対して、出版社の提案による、もしくは「未完成のものを一部づ、出版する」ために逍遙が選ん  
だという二つの可能性を示した部分である。柳田は『小説神髓』の成立<sup>3)</sup>で、同じく分冊形式が用いられた『小説神髓』（松  
月堂、明治一八（一八八五）年九月から明治一九年四月・全九冊）の出版経緯を逍遙の日記を元に辿っているが、この時  
も真相究明には至らなかった。

分冊形式の先例については、亀井秀雄の指摘もあるので引いておく。こちらは『小説神髓』についての解釈である。

いずれも約二〇ページの、こよりで綴じた簡便なパンフレット形式の冊子であり、版のサイズを別にすれば、福沢諭  
吉の『学問のすゝめ』に倣った出版方法だったと言えよう。<sup>4)</sup>

後の文脈を見ると、亀井の意図は『小説神髓』の印象を明治のマニフェストたる『学問のすゝめ』と重ね合わせること  
にあると思われるが、たしかに逍遙の二作と似ていなくもない。『書生気質』、『小説神髓』は共に半紙本（約二四×一七cm）  
で和装本。だいたい一冊一〇丁（約二〇頁）である。最大の特徴は和装本に多く用いられる四ツ目綴じではなく、亀井の  
いう通り、こよりを二カ所に打って綴じていることだ。

この出版形式を選んだのが誰かを明らかにすることは難しい。しかし、分冊形式の先例はもう少し追いかけることができそうだ。『註釋牡丹燈籠』、『名立波籠神於珠』、『学問のすゝめ』は確かに『書生気質』・『小説神髓』に先行するテキストである。しかし、『書生気質』が出版される際にはこの三作以上に『小説神髓』が、そして、『小説神髓』出版時には『書生気質』が造本へ影響を及ぼしたのではないか。

## 分冊形式

逍遙は『書生気質』以前にも書物出版に関係している。ウォルター・スコット『ラママアの花嫁』の訳書『春風情話』(慶應義塾出版社、明治一三(一八八〇)年四月)。ウォルター・スコット『湖上の美人』の訳書『泰西活劇 春窓綺話』(共同出版会社、明治一七(一八八四)年一月)。シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』の訳書『該撒奇談 自由太刀余波きんね』(東洋館、明治一七年五月)。リットン『リエンジー』の訳書『開卷悲憤 慨世士伝』(晚青堂、明治一八(一八八五)年二月)。『慨世士伝』には異装版(5)もあるが、これら四作は全て洋装本であった。大沼宜規「明治期における和装本・洋装本の比率調査」(6)は、「洋装本が主流になった後(明治一八から二〇年以降)」も、旧来からの宗教的・倫理的分野や、和風な趣味と考えられるような一部の分野では、比較的多くの書物が和装本の形態で出版されている。一方で、実用性が重視される分野、西洋文物・文化を移入・紹介する分野に和装本が用いられることは少なかったことが確認できた。このことは、書物の装丁選択が単なる技術的・経済的要因だけではなく、内容と密接な関係を有していたことを示すものである」と指摘する。書物の造本が内容に応じて選択されていた以上、翻訳書である四作が洋装なのは当然のことであった。(7)

では、出版社の状況はどうであったのか。『書生気質』を出版した晚青堂の出版物は、明治一八(一八八五)年から確認することが出来る。大澤眞吉『英仏商法比較要論』(二巻、明治一八年一月)(8)。逍遙『開卷悲憤 慨世士伝』(初編、明治

一八年二月)。高田早苗『英国政典』(全、明治一八年二月)の三作(四冊)は全て洋装本で、『書生氣質』に似た形式のものはない。

また、『小説神髓』を刊行した松月堂の書物は、『小説神髓』以外に確認できていない。刊記に記された松月堂の所在地を見ると、「東京本郷区湯島切通町三番地」とある。この住所は出版人の松永作次郎の住所である。明治二七(一八九四)年九月には、同名の「松永作次郎」名義で浮世絵が発行されているが、出版社の住所が異なる。<sup>9)</sup>書店名のみならば、山田美妙『新体詞華 少年姿』(香雲書屋、明治一九(一八八六)年一〇月)巻末の売捌書肆や、同じく美妙『新体詞選』(香雲書屋、明治二〇(一八八七)年二月再版)巻末の売捌書肆に名を連ねていることが確認できるため、店は構えていたようだが、それ以上のこととはわかっていない。松月堂は販売を主にした書肆であったのではないかと推測される。

著者と出版社には分冊形式の先例が見つからないので、柳田に倣って当時の出版物へと目を転じ、三田村鳶魚「明治式合巻の外観」<sup>10)</sup>を引用したい。

明治の小説を画すべき当世書生氣質が、合巻でもなく、洋綴でもなく、雑誌とも見るべき日本紙へ刷つた分冊で刊行されたことは、当時としては最も新しい型式<sup>11)</sup>たつた。

ここにいう「新しい型式」を、鳶魚が「書生氣質の発行方法其他」<sup>12)</sup>で詳しく述べるには、「小説雑誌の伝統<sup>13)</sup>され、速記物を立派にした清朝活字を採用したこと」が、「新しい発行方法」であった。補足すると、「小説雑誌」とは月三回四回と発行して読み物を分載した『芳譚雑誌』などを総称しており、「清朝活字」は版木に代って活字を用いたことを指している。したがって、鳶魚の感じた『書生氣質』の「新しさ」とは、新時代の出版技術そのものだといえる。

前田愛の「明治初期戯作出版の動向 近世出版機構の解体」<sup>14)</sup>が指摘するように、版木によって作られた幕末の長編合巻

が「季節的な需要とも見合った「春秋二度の發兌」（高橋阿伝夜叉譚）」がふつう」で、「一年に出版される分量はせいぜい二編から三編」であったのに対して、明治十年代には活版活字が普及し、旧時代とは比較にならないほど印刷・発行速度が増していた。このような技術革新の痕跡を、柳田・亀井の例示した分冊形式の書物はくつきりと留めている。明治五（一八七二）年二月刊行の初版本『学問のすゝめ』は四六判平綴じの活版本だ。ただし分冊形式としては、当初一冊完結の予定であったが、大反響のため書き継がれたという経緯があり、後述の二作とは性格が異なる。初版本題箋に記された「全」にはそのような訳があり、明治六（一八七三）年一月に二編を出版する際に、改めて先の「全」を初編と改めたのであった。

鳶魚のいう「小説雑誌」に連なるのは『龍神於珠』や『牡丹燈籠』であり、中本版に清朝明朝活字で刷られた。伊東専三『名立波龍神於珠』は、一五冊の分冊を明治一八（一八八五）年四月から七月の三か月間にわたって発行。出版届は三月九日と五月二〇日の二回にわかれており、それぞれ初編から五編、六編から一五編までとなる。刊記を見ると、初編から五編が十日おきに出版されたが、六編発行にはそれからひと月余が開いており、六編以降の執筆・出版準備に掛かった時間が察せられる。三遊亭円朝演術・若林筆記の『牡丹燈籠』もまた、講談全編が文字に起こされる前から出版され始めたことが、版權免許日と出版日から見て取れる。<sup>(13)</sup> そのうえ明治一七（一八八四）年七月に出版された「第九編」巻末には次のような付録広告が付されている。

此書素より円朝子の承諾を得て筆記せしものなれども子の繁忙きと出版を取急ぎたるとに依り原稿の校閲を子に請ふの暇なく草卒印刷に附したれば往々不完全の歎を免れざるにあり（…）第十編以下三冊ハ過般版權を出願したれば免許を蒙るまで暫く牡丹燈籠の発兌を見合せ版權免許次第第十編以下三冊ハ一途に発兌すべし

刊記をみると、一〇から一三編の四冊はすべて一〇月八日の版權が記されているのだが、一〇・一一編は一〇月の発行、一二・一三編は一二月の発行であるので、「一途に発売」とは謳っても、やはり製本出来次第発行していたようだ。以上のように、分冊形式の書物は、全編の脱稿を待たずに書き上がったものから順次出版届を出し印刷されたという共通点をもっているのである。

実は『小説神髓』と『書生氣質』は、『牡丹燈籠』を出版した東京稗史出版社から出版されることが決まっていた。したがって、稲垣達郎<sup>15</sup>や関良一が示した見解の通り、分冊発行された『書生氣質』『小説神髓』の直接的な雛形は『牡丹燈籠』と考えるのが妥当なのだが、どうもそれだけではないらしい。

### 東京稗史出版社と逍遙

東京稗史出版社については、磯部敦が『出版文化の明治前期 東京稗史出版社とその周辺』<sup>16</sup>等にまとめているので、詳細はそちらに譲る。東京稗史出版社は明治一五（一八八二）年創業の、馬琴の復刻を予約出版の形式で発行した新興の出版社であった。

逍遙の日記「幾むかし」<sup>17</sup>には、東京稗史出版社の社員・中尾直治がしばしば登場する。最初の記事は、明治一七（一八八四）年三月「稗史出版社々員中尾直治 近藤義住 白井五郎等に招かれて 新富座に観劇」である。この日のことは東京稗史出版社側の回想にも出てくる。逍遙が『牡丹燈籠』に序文を書いた経緯を、大柴四郎は次のように振り返る。

その頃（明治一七年）先生は学校を出たばかりのホヤ／＼の文学士で……学士と云へば何うして大したものでした……版元の近藤某は元来抜け目のない人でしたからこの新進の坪内学士を取込んで置けば都合がよいと云ふので、予

て芝居好きの先生を一夕新富座へ御招待申上げその帰りに万安で夕飯を差し上げるといふ下へも置かぬもてなし先生もすつかりお喜びになり〔…〕『牡丹燈籠』の序文もその時分に出来たものと思ひます<sup>(18)</sup>

このころ地位のある者に序文や跋文をもらうことが盛んであったため、東京稗史出版社は学士である逍遙に『牡丹燈籠』の序文を書かせようと画策しようだ。気をよくしたという逍遙は、これを受けて合巻版の『牡丹燈籠』(明治一八(一八八五)年二月)に序文を書いた。そのための打ち合わせもあったのだろうが、観劇を機に、中尾が度々逍遙を訪れるようになる。「幾むかし」より訪問の理由が記されたものを引いておく。

中尾直治来り小説の事を談ず (明治一七年七月一八日)

中尾直治来る、小説神髓の予約をなす (明治一八年二月七日)

中尾に逢うて書生氣質の予約をなす (同年四月九日)

「幾むかし」の記述が、作品タイトルを省略する傾向にあるのは確かだが、「小説の事を談ず」の「小説」が『小説神髓』の略称だとは断定できない。ただし東京稗史出版社は出版企画を積極的に持ちかける出版社であった。『小説神髓』の出版も東京稗史出版社主導で計画された可能性が高い。

例えば『牡丹燈籠』の速記者・若林珥蔵は、「その社〔東京稗史出版社〕の中尾某が余の所に来て、当時一流の落語家三遊亭円朝の人情話を寄席の高座で話すのをそのまゝ、速記して出版することを快諾したから、速記してくれ<sup>(20)</sup>」と述べたこと

を紹介し、東京稗史出版社から依頼を受けたことを回想する。管見の限りにおいて、円朝の発言自体は見当たらないが、「快諾した」という円朝に対しても、東京稗史出版社の側から接近したようだ。その証拠に、「円朝には稗史出版社(マ)から交渉したところ、承諾を得た」という若林の別の回想もある。また大柴四郎によれば、円朝は「原稿料が一文もいらぬ、たゞ先方は人気稼業だから時々気散しをやらしてくれ」という条件となった。「新進の坪内学士を取込んで置けば都合がよい」(大柴)のような積極的な姿勢で、東京稗史出版社は書籍出版を主導していったのである。仮に「小説の事を談ず」の「小説」が『小説神髓』ではなかったとしても、この日の会話が『小説神髓』出版の契機になったことは十分に考えられる。

### 発行準備の進捗状況

再び「幾むかし」の記述に戻ると、中尾と逍遙が「小説の事を談」じた翌年の明治一八(一八八五)年二月七日に『小説神髓』の出版予約が交わされた。『書生氣質』の予約は二か月後の四月二三日である。これを念頭に置いて、まずは『官報』に従い、二作の準備の進捗状況をみてみよう。

明治一八年四月一八日の『官報』(五三六号)「版權書目広告」において、『小説神髓』の版權が九日付で発布されている。引用中の「同」とは、同右のこと、出版地が東京であることを示す。

小説神髓 大本二冊 著 坪内雄蔵  
出版 中尾直治 同

その一方で『書生氣質』の版權認可が確認できるのは、同年五月二五日の『官報』(五六七号)「版權書目広告」で、一八日付であった。



このように『書生氣質』の版權が認可されるのは『小説神髓』よりも一と月以上後のことだ。しかし、実際に松月堂から『小説神髓』が出版されたのは、晚青堂から『書生氣質』が出版され始めて三か月後の九月のこと。いつの間にか作業の進行が逆転したことになる。

参考までに「幾むかし」から例を出せば、明治一七（一八八四）年七月二日に起稿した『慨世士伝』は一〇月一〇日に出版の予約が結ばれ、一二月二二日に脱稿。版權取得はやや先んじて二月一八日付で二二日の『官報』（四四七号）に記載されている。翌年一月一〇日に校正、同月二〇日頃には製本が完了し、上巻が発行される（下巻の出版は不詳）。国立国会図書館所蔵版<sup>(24)</sup>の奥付では出版日は空欄で、二月発行（『読売新聞』では三月五日に出版広告がみられる）。洋装本の例であり、発行部数にもよるだろうが、脱稿から一と月で三八四頁の本が完成している。それなのに、二月に出版予約をした『小説神髓』が発行されたのは七か月後と、『慨世士伝』の倍近い時間がかかっている。これは、逍遙が執筆に手間取ったというよりも、東京稗史出版社の側に問題があったとみられる。東京稗史出版社は五月に経営破綻したのである。<sup>(25)</sup>

東京稗史出版社の「版權書目広告」と、晚青堂・松月堂の実際の出版物とを比べると、出版順序の逆転のほかに、二作が「大本」で企画されていたことが相違点としてあげられる。二作は共に半紙本の判型で出版された。半紙本の場合は、「版權書目広告」には「中本」と記される。<sup>(26)</sup>さらに目を引く変更点は、実際には九冊の分冊であった『小説神髓』が「二冊」とされており、一七冊の分冊であった『書生氣質』が「三冊」と記されていることだ。

『書生氣質』の冊数について磯部敦は、「同書『書生氣質』の版權を取得したのは明治一八年五月一八日のことで、『大本三冊』で出版予定であったことも確認できる」としていた。ただし判断を下す前に『官報』明治一八（一八八五）年八

月七日（六三一号）を確認する必要がある。八月六日付で再び『書生氣質』の版權が發布されているからである。

二歌謡  
『書生氣質』 中本二冊 著 坪内雄蔵  
出版 間野秀俊 同

出版された『書生氣質』の奥付や刊記と見比べてみると、五月二五日付の版權は『書生氣質』「第一号」から「第三号」分に相当し、八月六日付の版權は「第四号」「第五号」分に相当する。「第六号」以下も同様に、別々に版權を取得している。<sup>(28)</sup>『書生氣質』は、『牡丹燈籠』や『名立波籠神於珠』と同じく、全編の脱稿を待たずに分冊で出そうという計画だったのだ。その一方で『小説神髓』の版權に関する記述は明治一八年四月一四日の『官報』（五三六号・四月九日付）のほかにない。分冊『小説神髓』の刊記・奥付を見ても、「第一冊」から「第九冊」の全てに四月九日付の版權が記されている。『小説神髓』の原稿はこの日には全編分が入稿されており、<sup>(29)</sup>そのうえで上下巻の二冊本で出版される予定が立てられていたのである。東京稗史出版社が『小説神髓』を「全二巻」で発行する旨を記した近刊広告<sup>(30)</sup>からも、二冊本での出版計画は間違いなかったことが見てとれる。

次は判型についてである。『小説神髓』の「第一冊」から「第九冊」のすべての柱には「東京稗史出版社」とある。実際の出版社・松月堂（松永作次郎）とは異なる社名が記されているのは、東京稗史出版社が印刷をすでに完了させていたことを示しているとみてよからう。その一方で、『書生氣質』の柱には正しく晚青堂の社名が記されている。版權譲渡の時点において、東京稗史出版社は『書生氣質』の印刷までは達していなかったのである。『書生氣質』は、晚青堂の下で半紙本の判型が選ばれ、『小説神髓』の大本からの判型変更は東京稗史出版社によって行われた。山本和明によると、「鈴木重嶺『雅言解』「出版版權御願」でも「大本」と記しながら、版本の大きさは「中本」となっていた<sup>(31)</sup>」とあり、このような変更は可能であったようだ。

『書生氣質』の四号以降を追ってゆくと、先に挙げた明治一八（一八八五）年八月七日の『官報』（六三二号）で、『書生氣質』の「第四号」「第五号」は「中本」とされている。出版人は間野秀俊であった。この件に関連する記述を、再び逍遙日記「幾むかし」より引用する。

中尾失敗し 芝区三田台裏町十七番地に移転 書生氣質破約となる 間野に譲る（明治一八年五月一七日）

中尾直治来り、書生氣質版權譲受をす 間野と出版を相談す（同年五月二四日）

東京稗史出版社は、『書生氣質』の版權を申請した直後、経営に「失敗」していた。そのために行われた「版權譲受」は、明治八（一八七五）年の出版条令第十三条で「版權年限未タ終ラサルノ間ハ版主ノ相続人ニ伝フヘシノ但シ版權譲受ノ由ヲ相続人ヨリ内務省ヘ届ケ出ヘシ」と許可されている。そのうえで間野が『書生氣質』「第四号」「第五号」の版權を「中本」で申請していた。これはもちろん、六月から出版し始めた『書生氣質』「第一号」から「第三号」を半紙本にしたためで、『小説神髓』と同じ判型を採用したということにほかならなかった。

### 『小説神髓』の分冊形式

東京稗史出版社が倒産しなかったならば、『小説神髓』は半紙本上下二冊で、『書生氣質』は半紙本分冊形式で出版されたことだろう。この場合、装丁の簡易な『書生氣質』の見栄えが気になるが、東京稗史出版社にはひとつの構想があった。分冊形式の先例である『牡丹燈籠』の表紙裏には、次の「社告」<sup>(3)</sup>が記されていた。

本書を前金にて購求せらるゝ諸君へは全備の後本書を当社へ御廻送あらば更に序文口絵を加へ無代価にて美麗に製本すべし

実際に「美麗に製本」された事実は確認できていないが、分冊形式は仮のかたちで、後には製本が控えていた<sup>34)</sup>。もしも『書生氣質』が予定通り東京稗史出版社から出版されたならば、『牡丹燈籠』同様の「社告」が添えられ、刊行終了後に「美麗に製本」する計画であったとみてよからう。製本された『書生氣質』は、『小説神髓』によく似た造本の書物となっていたはずだ。『書生氣質』の分冊形式は、東京稗史出版社の選んだ得意の形式なのであった。晚青堂は「美麗に製本」こそしなかったものの、分冊発行は東京稗史出版社が『牡丹燈籠』に用いた手法をそのまま踏襲したといっている。

その一方で、同じく分冊形式で出版された『小説神髓』には不思議な点がある。最終丁の文章が中途半端に途切れているのだ。「第一冊」を例にすると、「別に聖賢の書を閲して已に道義をしも弁知したれば」と続く文章が、「別に聖賢の書」までで唐突に終わる。もちろん『小説神髓』が後に「製本」されたならば違和感はなくなるのだが、『書生氣質』では文章が次号にまたぐことはなく、最終丁内に区切りよく収まるよう組版がなされている。東京稗史出版社が発行した分冊『牡丹燈籠』も同様で、毎回「怪談牡丹燈籠第一巻編終」といった区切りが明示される<sup>35)</sup>。

この謎は、東京稗史出版社が印刷を終えていたことに原因があったと考えられる。

西野嘉章は「合巻」<sup>36)</sup>において『小説神髓』の分冊形式を「江戸戯作で使い古された出版形式」や「旧式」と評しているが、この見解では先の謎は解けない。

『小説神髓』は「…」上下二巻での出版を予告していた東京稗史出版社が、原稿を刷り上げた段階で事業に行き詰まり、出版は頓挫。版芯に「東京稗史出版社」とある刷り出しを本郷湯島切通し<sup>37)</sup>にあった松月堂が譲り受け、同年(明治一八年)

九月から分冊形式での発売が開始された。「……」表紙は本文と共紙である。たしかに、表紙としては軟弱すぎるきらいもないではない。しかし、これは全冊揃ったところで「合巻」することを前提としていたからである。

西野は分冊形式の後に出版された松月堂合巻版の存在を知ったうえで、「合巻」することを前提としていた」と判断してしまっただけではないか。西野の判断は、既に刷り上がっている書物がわざわざ分冊形式で出版されたことへの疑問を解消する見解としては、きわめて不十分だ。先に見た通り、分冊形式とは全編の脱稿に先んじた発行開始を目的としていた。原稿が揃い、印刷も完了しているのならば初めから全編発行が出来る。西野はこの後『書生氣質』をあげ、分冊形式の出版終了後に合巻版が発売される点で「同じ手順」だとする。しかし、原稿が揃う度に版權を得るといいうわば通常の分冊形式をもって出版された『書生氣質』と、全編を脱稿し版權を得たうえ印刷まで済ませていた『小説神髓』とは、おのずと分冊の意味は異なる。解決の糸口となるのは、磯部敦が指摘する東京稗史出版社版の『小説神髓』上下二冊本の存在である。

明治大学図書館および千葉県中央図書館所蔵の『小説神髓』二冊本は松月堂の刊行になるものだが、黄土色無地の表紙に「東京稗史出版社之章」の型押しが見られるように、東京稗史出版社版のものを用いている。「……」版權譲渡の際に、製本ともども一緒に渡したようだ。<sup>(37)</sup>

明治一八（一八八五）年四月の時点で「全二巻」という広告が出ていたことにも納得がゆく。東京稗史出版社は、印刷だけでなく製本まで完了させ、出版準備は調っていた。にもかかわらず、松月堂版『小説神髓』では、分冊形式での出版が選ばれたのである。

明治大学図書館所蔵版<sup>⑧</sup>を調査したので、結果を以下に記す。

本編は梓や書体から松月堂分冊版（明治一九年五月以降に出版）と同一のものであると判断できる。扉は松月堂版の上下版と同じものが用いられ、「下巻」の巻末には正誤表と逍遙によるあとがきが挿入されていた。あとがきの署名には「明治十九年五月」と付されている。署名の日付から判断して松月堂の印刷である。ただし、正誤表とあとがきの丁の柱には、松月堂の印刷であるのにもかかわらず「東京稗史出版社」と記されている。見た目に配慮して揃えたのであろう。<sup>⑨</sup>以上の点から、明治大学所蔵版『小説神髓』の「下巻」については、東京稗史出版社版本来のかたちを留めているとは言い難い。ただし、仮留めの痕跡は見当たらないため、分冊化を免れた書物であると考えてよからう。磯部の指摘する千葉県中央図書館所蔵版を調査する機会をまだ得ないが、東京稗史出版社の表紙を備えた合巻が複数冊見つかっていることから、東京稗史出版社によって『小説神髓』の製本が行われていたことはほぼ間違いない。

### 『書生氣質』と『小説神髓』の分冊形式

以上を踏まえ、『書生氣質』と『小説神髓』の出版計画を示しておこう。出版社は東京稗史出版社である。出版は①から⑨までの順序で行われる予定であった。

- ① 『小説神髓』の出版予約
- ② 『書生氣質』の出版予約
- ③ 『小説神髓』の版權取得―大本二冊
- ④ 『小説神髓』の印刷・製本開始―半紙本二冊

- ⑤ 『書生氣質』の版權取得（一から三）——大本分冊形式
- ⑥ 『小説神髓』の出版——半紙本二冊
- ⑦ 『書生氣質』の印刷・製本——半紙本分冊形式
- ⑧ 『書生氣質』の出版開始——半紙本分冊形式
- ⑨ 『書生氣質』の製本——半紙本二冊

実際の出版は、①から⑤までは計画通りに進んだが、東京稗史出版社の事業失敗によって、その後、複雑な経過を辿ることとなった。予定と区別するため数字の色を反転させる。

- ① 『小説神髓』の出版予約
- ② 『書生氣質』の出版予約
- ③ 『小説神髓』の版權取得——大本二冊
- ④ 『小説神髓』の印刷・製本開始——半紙本二冊
- ⑤ 『書生氣質』の版權取得——大本分冊形式
- ⑥ 『書生氣質』の版權が晚青堂に譲渡される
- ⑦ 『書生氣質』の印刷・製本——半紙本分冊形式（計画⑦）
- ⑧ 『書生氣質』の出版開始——半紙本分冊形式（計画⑧）
- ⑨ 『小説神髓』の版權と二冊本が松月堂に譲渡される
- ⑩ 『小説神髓』の表紙印刷——二冊本を分解し、分冊として再製本

① 『小説神髓』の出版開始—半紙本分冊形式

磯部敦によれば、「半紙本型和装本、黄土色無地の表紙に「東京稗史出版社之章」というのが、東京稗史出版社の出版物に共通する装丁である」<sup>⑩</sup>ので、計画通りに出版されていたならば、『書生気質』と『小説神髓』も最終的にはこの装丁に落ち着いたはずだ。また、東京稗史出版社が予約出版で馬琴の復刻を多くしたことを思えば、先に出版されるはずの『小説神髓』は、読者にどのように受け入れられたのであろうか。

そう考えると、実際に出版された『書生気質』と『小説神髓』が、半紙本で分冊形式であったことには、何か決定的な戦略が潜んでいるのではないか。『小説神髓』に、本来の目的から逸脱した分冊形式が用いられたことと、『書生気質』の発行方法とは無関係なのだろうか。『小説神髓』分冊形式の戦略性を確定するだけの資料がなく断言することはできないが、巻末の途切れ方だけを見て「書物としての不体裁」<sup>⑪</sup>だとは言いつけないのではないか。『書生気質』を買い続ける内に『小説神髓』と出会った南方熊楠<sup>⑫</sup>のような読者がいるのだから、『書生気質』と『小説神髓』が東京稗史出版社から出版されなかったことの影響は一考に値する問題であらう。この点の検証については他日を期したい。

註

- (1) 坪内逍遙『当世書生気質』(岩波文庫、昭和二二(一九三七)年三月 引用は第一六版昭和三〇(一九五四)年八月)。柳田が編者として関わった『逍遙選集』(別冊第一、春陽堂、昭和二(一九二七)年九月)の「緒言」には、「『書生気質』『妹と背かゞみ』『内地雑居未来之夢』は」雑誌型分冊式とでも名づくるべき方法で、和紙仕立て、毎月一冊つつ発行されたものでした。斯ういふ式で小説を出版、発売したことは、内外共に、曾て前例がなかつたやうです」と、異なる意見が記されて



いた。

(2) 「これ〔文庫本が形成する「ひとつのまとまり」〕をデザインの面から考えれば、一目見て○○文庫と識別できるようなことである。そのために版元は判型、紙質、図案などを統一し、通し番号などを付す。もちろんこれは文庫に限ったことではなく、叢書、全集などにも当てはまるし、刊行書全てに特有のフォーマットを適用している出版社も存在する。〔…〕この出版におけるフォーマリズムが非常に明瞭な形で現われたものが文庫と呼ばれる小宇宙なのである」〔「文庫の顔つき」ニッポン文庫大全〕ダイヤモンド社、平成九（一九九七）年一月。

(3) 『明治文学研究』昭和九年二月号

(4) 亀井秀雄「パースペクティブ」〔小説〕論『小説神髓』と近代』岩波書店、平成二（一九九九）年九月

(5) 「ボール表紙背クロス、及び総クロスの二種あり」〔滝田貞治「修訂 逍遙書誌」昭和一二（一九三七）年二月 引用は国書刊行会、昭和五三（一九七六）年五月復刊〕とされる。

(6) 『日本出版資料―制度・実態・人―』八、日本エディタースクール出版部、平成一五（二〇〇三）年五月

(7) 翻訳小説である『春風情話』から『慨世士伝』までが洋装であり、『書生気質』『小説神髓』が和装である。挿絵へ目を向けると、翻訳と創作との差が歴然とする。洋装の挿絵が石版であるのに対し、和装は木版である。『早稲田文学』（明治二九（一八九六）年一〇月号）の「彙報」には「〔学者政治家など〕で小説を書いた者は」自家の品位を保たんがために、在来の小説と同一視せらるゝを恐れ旗幟を明にする必要より先づ浮世絵を擯けたると同時に、此等の人々は、多く洋学を修め、洋画にも目馴れたれば、さてこそ石版画採用の機運をつくるに至れる」とある。

(8) 一卷には奥付が無い。関良一は『当世書生気質』の形態と本質』〔逍遙・鷗外考証と試論』有精堂出版、昭和四六（一九七二）年三月）で、『書生気質』刊行時点において、晚青堂からは『私撰商法比較要論』全七冊が分冊で刊行されつつあった』としており、『官報』明治一七（一八八四）年一〇月六日（三八三号）においても「中本七冊」とされているが、三巻以降は確認できず、二巻で終了したのだと思われる。またこの本は一冊が二〇〇頁を超える洋装本で、形式の面で『書生気質』『小説神髓』とは似ても似つかぬものである。

(9) 函館市中央図書館蔵、小林清親の「栄城湾上陸后之露営」「栄城湾上陸后之露営」「栄城湾上陸后之露営」の出版者・松永

作次郎の住所は日本橋となっている。国立国会図書館も参照した。

- (10) 『早稲田文学』大正一三年三月号
- (11) 『早稲田文学』大正一四年七月号
- (12) 『近代読者の成立』岩波書店、平成五(一九九三)年六月
- (13) 『名著復刻全集 近代文学館 作品解題 ——明治前期——』(日本近代文学館、昭和四三(一九六八)年一二月)の『学問のすゝめ』の解題参照。
- (14) 刊記により版權免許日と出版月を記す。凡例「『号数』版權免許日・出版月 ※年はすべて明治一七年」一・七月一四日・七月、二・同日・同月、三・七月二五日・八月、四・七月二三日※上貼・八月、五・同日※上貼・八月、六・同日・九月、七・七月二三日・七月、八・同日・同月、九・同日・同月、一〇・一〇月八日・一〇月、一一・同日・同月、一二・同日・一二月、一三・同日・同月。
- (15) 稲垣達郎は『名著復刻全集 近代文学館 作品解題 ——明治前期——』(日本近代文学館、昭和四三(一九六八)年一二月)の『書生氣質』の解題や、『明治文学全集 16 坪内逍遙集』(筑摩書房、昭和四四(一九六九)年二月)の「解題」で同様の見解を示す。また、関良一も『当世書生氣質』の形態と本質』(『逍遙・鷗外考証と試論』有精堂出版、昭和四六(一九七二)年三月)で、「刊行形式上の関連」を指摘している。
- (16) 磯部敦には、『出版文化の明治前期 東京神史出版社とその周辺』(べりかん社、平成二四(二〇一二年二月)や、『書籍の近代——東京神史出版社の明治一五年』(鈴木俊幸編『書物の宇宙』平凡社、平成二七(二〇一五年五月)といった東京神史出版社の研究がある。
- (17) 大村弘毅 写筆校注「逍遙日記 幾むかし ——逍遙自選日抄録——」(『坪内逍遙研究資料 第五集』(新樹社、昭和四九(一九七四)年五月)
- (18) 大柴四郎「酔つた逍遙先生 寄席の民衆娯楽が初めて 活字になつた頃の嘸し(下)」(『読売新聞』大正一五(一九二六年一月一〇日朝刊第四面)
- (19) 森銚三「序跋」(『書物』白揚社、昭和一九(一九四四)年三月 引用は『森銚三著作集 第九卷』平成六(一九九四)年

二月)は、「明治から大正へかけては、第三者の序跋を乞うて自著を飾るといふことは相当に盛であった。〔…〕書物を售らうがための方便として、大家名家の余分を出版社側で強ひて乞うて付けさせることなどもあった」と指摘する。

(20) 若林珪蔵「予と円朝 故三遊亭円朝の事ども(六)」「サンデー毎日」大正一五(一九二六)年一〇月一七日)

(21) 若林珪蔵「三遊亭円朝の「牡丹燈籠」(若翁自伝)若門会、大正一五(一九二六)年一〇月)

(22) 大柴四郎「原稿料は口ハダ 寄席の民衆娯楽が初めて 活字になつた頃の嘶し(中)」「説売新聞」大正一五(一九二六)年一月九日朝刊第四面)

(23) 菊亭香水「世路日記」(東京稗史出版社、明治一七(一八八四)年九月)出版に際しても東京稗史出版社は積極的に作者へ働きかけた。「明治文学名著全集」版の神代種亮「解題」には、「東京書肆(東京稗史出版社)の情に委せ、改めて惨風悲雨世路日記と題し、東京にて発兌せるもの即ち是れなり」(菊亭香水「明治文学名著全集 第九篇 世路日記」東京堂、大正一五(一九二六)年一二月)とある。

(24) 書誌ID:000000518304 その他、静岡大学附属図書館所蔵版(資料ID:001517893)にも日付はない。

(25) 磯部敦「東京稗史出版社の研究」(『出版文化の明治前期 東京稗史出版社とその周辺』前掲)は、「予約金不要と甘い目算による方法上の「失敗」であつた」と指摘し、予約出版の前金を回収しなかつたため購読者を繋ぎとめることができなかつたとしている。

(26) 山本和明「小説神髓」の研究」(『新日本古典文学大系明治編 月報』8、岩波書店、平成一四(二〇〇二)年一〇月)によると、「この当時の内務省の区分は「版權書目広告」や「出版書目月報」を見る限り「大本・中本・小本」の三種であつた。「八犬伝」版本の大きさである半紙本は「中本」、四六ボール表紙は「小本」に属する」。また晚青堂が取得した『書生氣質』(半紙本)の版權は「中本」である。

(27) 磯部敦「東京稗史出版社の足跡」(『出版文化の明治前期 東京稗史出版社とその周辺』前掲)

(28) 刊記により版權免許日と出版を記す。凡例「号数:版權免許・出版月」[明治一八年]六:明治一八年八月二二日・※空欄、七:同日・九月一六日、八:九月四日・九月二六日、九:同日・一〇月※日付空欄、一〇:九月二五日・一〇月※日付空欄、一一:同日・同月※日付空欄、一二:同日・一二月※日付空欄、一三:同日・一月※日付空欄、一四:一月一三日・一二

月※日付空欄、一五・同日・一二月※日付空欄、「以下明治一九年」一六・一月一四日・一月※日付欄なし、一七・一月一四日・一月※日付欄なし。

(29) 明治八年の「出版条令」の第三条は「出版届版權願トモ草稿ヲ添ルニ及ハスト雖モ時トシテハ草稿ヲ徴シ検査スルコトアルヘシ」(『明治二年法令全書』内閣官報局、明治二〇(一八八七)年一〇月)とされ、申請時に草稿を添える必要までではないものの、原稿は完成しないしそれに近い状態であったと考えられる。

(30) 伊東専三『名立波龍神於珠』(四編、東京金玉出版社、明治一八(一八八五)年四月二七日)の表紙裏や、『中央学術雜誌』(明治一八年五月一〇日号)等。その他、青木稔弥が「婦女幼童の小説神史」(『江戸文学』一九九九年一二月号)で報告した「一枚物の広告」でも、東京神史出版社の二冊本発売が記されている。

(31) 山本和明『小説神髓』の周縁(『新日本古典文学大系 明治編 第18巻月報8』岩波書店、平成一四(二〇〇二)年一〇月)『明治二年法令全書』内閣官報局、明治二〇(一八八七)年一〇月

(32) 『小説神髓』の周縁(『新日本古典文学大系 明治編 第18巻月報8』岩波書店、平成一四(二〇〇二)年一〇月)

(33) 三遊亭円朝『怪談牡丹燈籠』(第一編、東京神史出版社、明治一七(一八八四)年七月)

(34) 『小説神髓』よりも後の逍遙の分冊形式の作品では、会心書店の分冊『妹と背かがみ』(明治一八(一八八五)年一二月から明治一九(一八八六)年九月)の表紙裏に、「本書完成之節御送付アラハ無代価ニテ美麗ニ製本シテ返還ス/但シ往返運賃ハ御自辨ノ事」と、後に製本される計画が記されている。ただし晚青堂の『内地雑居未来之夢』(明治一九(一八八六)年四月から一〇月)にはない。稲垣達郎「解題」(『明治文学全集 16 坪内逍遙集』前掲)もこの点を指摘している。

(35) そのほか、川上鼠文『滑稽笑談清仏船栗毛』(第一編、松成堂、明治一七(一八八四)年九月)、三遊亭円朝演述 若林鑑三筆記『円朝叢談塩原多助一代記』(第一編、速記研究会、同年一二月)などを見ても、文章は区切りよく納められている。一方で『名立波龍神於珠』は、本文が中途半端に切れているが版權は二度に分けて取得されており、全編の脱稿を待たずに出版が開始されている。ただし文の途中で巻が変わるものは少数で、『龍神於珠』と『小説神髓』以外の例は見つかっていない。

(36) 西野嘉章『装釘考』玄風舎、平成二二(二〇一〇)年四月

(37) 磯部敦「東京神史出版社の足跡」(『出版文化の明治前期 東京神史出版社とその周辺』前掲)

(38) 資料ID: IX0810242 (上巻)・IX0810250 (下巻)

(39) 明治一九年五月以降に発行された松月堂の表紙が用いられた上下二冊版でも、正誤表とあとがきの柱には「東京神史出版社」とあり、見た目への配慮が窺われる。

(40) 磯部敦「東京神史出版社という印刷所」(出版文化の明治前期 東京神史出版社とその周辺)前掲)

(41) 宗像和重「解説」に、「『小説神髓』は当初、東京神史出版社と契約を結び、印刷まで完了した時点で出版社が事業に失敗したために、刷本が松月堂に譲渡されたといわれている。その結果、半紙を二つ折りにした本文を各冊十丁ずつ(第一冊は「緒言」「目次」を含めて十三丁、第九冊は九丁)に機械的に分冊して紙捻で綴じただけの、ごく簡素な製本になっている。したがって、各冊の区切りは多くの場合、各章ごとでも、段落の切れ目でも、文と文との間でさえなく、たとえば第一冊は「小説の変遷」の「大人具眼の士は別に聖賢の書」(本書「岩波文庫『小説神髓』三十四頁三行)で終わり、第二冊は「を閲して」から始まるという変則ぶりであった。こうした書物としての不体裁に甘んじてもお、「わが熱衷と論旨をめで、熟読吟味」(緒言)されることへの強烈な欲求を、押しとどめることはできなかったのである」(坪内逍遙『小説神髓』岩波文庫、平成二二(二〇一〇)年六月改版)とある。

(42) 『南方熊楠日記』一、八坂書房、昭和六二(一九八七)年七月

※引用に際し、原則として漢字を常用字体に改め、ルビは省いた。また、引用部中の亀甲括弧は引用者による補足を示し、〔…〕は省略を、／は改行箇所を示す。

(文化創造研究科博士後期課程)